全教神協広報

第一〇号
全国教育関係神職協議会
〒一五一-〇〇五三
東京都渋谷区代々木一-一-一
神社本庁内
電話　〇三-三三七九-八〇一一
FAX　〇三-三三七九-八一九九
題字　諏訪秀一氏

新型コロナウイルス感染症に向き合った教育現場で感じたもの

全国教育関係神職協議会 副会長　廣江　直澄

令和二年八月小職の勤務校で起きた新型コロナウイルスの集団感染は、国内最大のメガクラスターとしてあらゆるメディアを通じて連日センセーショナルに報道されました。

校長、教頭は県庁と市役所と保健所から指導助言を受け、実働可能な教職員で全生徒への対応、保護者への対応、関係機関への連絡、鳴りやまぬ苦情や問い合わせの電話対応と奔走しました。陰性だった教職員も何時陽性転換するかも分からず、感染の恐怖と隣り合わせでの対応が続きました。中には家族に医療従事者・介護従事者が居り出勤したくても叶わないケースもあり、本当に限られた人数で困難に立ち向かうことになりました。

県の判断で療養施設として生徒寮を使用するのは異例の対応で、陰性だった生徒は学校で待機とし教室に被災者が避難所で使う段ボールベッドを持ち込み、ゾーニングして動線を確保し、一般教室をほとんど使用しました。

防護服を纏った県職員の方から用具を受け取り、半袖短パンで大汗を掻きながら設営する我々との対比が不気味さを増幅している様でした。それでも幸いだったのは、校長、教頭、事務長と要の三人が陰性で陣頭指揮が取れ、学校が機能したことでした。

更には県外生徒が多い本校は寮生が殆どで、部活単位での共同生活で培われた連帯感は強く、保護者も含め部活の顧問を中心に教職員との信頼関係が深いこともあり、辛く長い隔離生活を理解と協力により乗り越えられました。

当初は、全国放送のワイドショーで取り上げられると合わせるように電話が鳴り始め、大半はバッシングですべての回線が塞がれることもありました。

隔離中には各自が所持する携帯電話が外部の家族や知人と繋がるツールとして有効でしたが、反面ネットニュースやSNSに流れる情報に心を痛めたのも事実でした。

感染した生徒に重症者は無く、軽症・無症状が殆どで快方に向かい市中への感染拡大もありませんでしたが、近隣への影響は続き、学校近辺の商業施設の人出は激減し病院や介護施設の面会などは制限されました。突然家族に会えなくなった理不尽、風評による偏見を受けた人たちの戸惑いと行き場のない憤りは学校にも伝わり、どうすることもできない状況にただ申し訳ない思いで一杯でした。

この感染症のもう一つの怖さは、無関係の人が風評により被害を受け、社会の空気を異常で沈鬱なものにすることでした。程なく地元紙に載った高齢の方のお見舞い投書に依って地元から多くの支援が学校に向けられる様になりました。

また、元サッカー日本代表の本田圭佑選手の生徒を励ますツイートが反響を呼び、青森山田高校をはじめ全国のサッカー強豪校からも応援メッセージが届き、一般からの支援の輪は全国に広がり、学校は魂が震えるほどの感動と勇気を頂きました。本当に感謝しかありませんでした。

この頃から報道は支援の様子を伝え学校への苦情はなくなっていきました。これもメディアのお蔭であり、まさに諸刃の剣であると痛感しました。

この未曾有の経験で社会の空気はメディアによって簡単に形成され、憎悪にも美談にも発信者でどうにでもなると思いました。また空気・雰囲気などがもたらすものは目に見えませんが、とてつもなく強大なエネルギーを持っていることを感じました。日本の社会の動きも人々の感情もこの空気によって左右され、まさに景気は人々のマインドが作るものと言われるのがよく理解できました。

コロナ禍で気枯れた状態だった学校も、多くの支援を頂き再生することができ、改めて心や精神は生命の源となっていることが分かりました。

教師が日々の教育で、子どもたちにどれだけの感動を与えられるのか。どれだけ共鳴する気を送れるのかが問われ、それは根気、元気、勇気、本気等の生きる力を涵養することになると思いました。スマートでクールなものが求められ懸命や泥臭さというものが忌避される風潮はありますが、教育関係神職者として気のエネルギーを学校教育や神明奉仕で生かされるように精進努力を続けていく必要性を感じました。